

〔学会記録〕

第2回東日本学園大学歯学会総会

(昭和58年度総会)

— 一般講演抄録 —

(昭和58年3月12日, 歯学部476講義室)

1. 下顎両側小白歯部過剰歯とその他の異常を伴った1例

菊地正修, 畑 良明, 南出千景,
池田浩之, 長滝 敬, 岡田泰紀 (保存・Ⅱ)

1. 下顎両側小白歯部に3歯の存在を認めたが, それぞれの発育がほぼ正常でいずれが過剰歯であるか断定は出来なかった。また, 下顎両側第1大臼歯に過剰根が認められ, その発育も他の根と同等であった。

2. 過剰歯, 過剰根の成因については, いまだ定説がないが, 本症例では過剰歯, 過剰根は個々の原因によって生じたものではなく, 同一の何らかの原因によって歯胚が分裂し, それが一方で過剰歯, 他方で過剰根を発生させたのではないかと推察された。

3. 上記の原因(影響)は少なくとも第1大臼歯々胚の形成が始まる胎生3ヶ月から小白歯々胚の形成が始まる生後8ヶ月まで及んだものと思われる。

4. 比較的長期に何らかの原因(影響)が作用したことはその間に形成される他の歯の歯冠幅径が正常値よりも若干下廻っていることから推察出来るものと思われた。

人類の進化に伴って, 歯は退化する傾向すなわち, 形態の縮小, 単純化, 歯冠概形の鈍円化, 歯数の減少などを示し, その速度も歯種あるいは個々の歯によってさまざまであるといわれている。しかし临床上, 過剰歯に遭遇する機会は決して稀ではなく, Stafneによるとその頻度は0.09%, とくに下顎小白歯部では総合すると0.006%と推定しているが, 両側性に出現した報告は少ない。

なお, 過剰の多くが栓状歯, 矮小歯状の形態を呈しているのに対して, 小白歯部に出現した過剰歯はほぼ隣在歯, ことに第2小白歯に類似することが多いといわれて

いる。

今回, 演者らは38歳女性の下顎両側小白歯部に1歯づつ過剰歯を有し, しかも両側第1大臼歯に過剰根を有した興味ある1症例に遭遇, これを肉眼的, レントゲンの詳細に調査する機会を得, その発生原因などについて考察し, 上記のような知見を得た。

質 問 金子昌幸(放射線)

①本症例の過剰歯を第3生歯と考えてよいのでしょうか。

②系統疾患によることは考える必要はないでしょうか。

回 答 畑 良明(保存・Ⅱ)

本症例については遺伝的検索を詳細に行わなかったが, 遺伝的影響はないと思われる。

演者が言った表現型模写(Phenocopy)は何らかの原因によって, その過剰歯, 過剰根などの異常が出現することであり, その影響は口腔内の全歯牙の計測値が正常よりも小さいことから十分に推察されると思う。

質 問 田隈泰信(口腔生化)

過剰歯の発生原因のみに先祖がえりが考えられるといわれましたが, 類人猿の小白歯は人間より多いのでしょうか。

回 答 南出千景(保存・Ⅱ)

いわゆる過剰歯発生原因を先祖がえりとする, 小白歯部に2ヶ以上の症例がみられることや, 犬歯にも過剰歯がみられることがあることなどより, 過剰歯発生原因を先祖がえりとするには無理があると考える。